

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	23
都道府県名	愛知県

()
 該当する観点にチェックをすること

・学校名及び規模

東海市立緑陽小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	2	3	2	2	2	2	1	14	17	
児童数	67	87	63	59	71	58	2	407		

・実践研究の概要（主題（テーマ）及び設定の趣旨）

<p>・主題（テーマ） 確かな学力を身につけ、生き生きと授業に取り組む児童の育成 少人数指導とコミュニケーションを中心に据えた授業を通して</p> <p>・テーマ設定の趣旨 本校では、過去2年間コミュニケーション能力（聞く・話す力）の育成に力を入れて取り組んできた。その成果が出て、授業で活発に意見交換したり、みんなの前で自分の考えをわかりやすく発表したりすることができる児童が少しずつ増えてきた。 本年度、学力向上フロンティアスクールの指定を受け、少人数指導に取り組むことになったが、今まで育ててきたコミュニケーション能力は今後も大切に指導していきたいと考えた。具体的には、少人数指導になっても授業においてはコミュニケーションを中心に据えた授業を展開することにより、学力を向上させることができると考え、テーマを設定した。</p>

・実践研究の内容について（選択した観点を中心に記述）

() 研究体制の工夫

教師の人数から、1学期は3年生以上の国語と算数で、2学級を解体し3展開の少人数指導と5年生の理科においてTTによる少人数指導を行った。算数は習熟度別学級編制、国語は学級間等質の学級編制で行った。国語は、言語事項を指導する単元のみ3クラス編制で行った。しかし、教師と児童の実態から国語では学級を解体する弊害が現れたので、2学期以降は国語での少人数指導を中止した。2学期以降は、1学期国語の指導に当たっていた少人数指導担当教師を算数に充てた。従って、2学期以降算数において3年生は2学級3展開の習熟別少人数指導を3人体制で、4年生以上は、2学級3展開の習熟別少人数指導を4人体制で指導することにした。5年生の理科は、1学期に引き続き、TTで行うことにした。また、少人数指導をする際の打合せの時間を週予定に位置づけ、共通理解を図って指導を進めるようにした。

() 実践研究の内容

<算数科における習熟度別少人数指導>

教科選定の理由

算数には、内容の系統性が明確であるという教科の特性がある。新しい内容を学習する際には、それまでに学習してきたことを基にして、それを発展させるようにして学習を進めていくことが多い。このような算数では、個々の習熟度の差があると全員に確実に理解させることは不可能に近い。また、答えが限定されている算数では、「できた」「できない」が明確で、児童自身もできた喜びとできなかった悔しさをはっきりと味わうことになる。できなかった悔しさを味わい続けると次第に意欲はなくなってしまふ。習熟の遅い児童に焦点を合わせた授業では、習熟の速い児童は授業に退屈してしまうだけでなく、その力を十分に伸ばすことができない。そこで、より多くの児童に個々の実態に応じた指導を行い、個々の学力をより一層伸ばしたいと考えた。

学級編制の方法

- ・ 習熟度別の学級編制は、2学級を解体し、3つの習熟度別編制とする。
- ・ 学級の決定は、児童と保護者の希望を優先する。本人に合っていないときは、教師から保護者と児童に伝え、学級が変わることも可能とする。
- ・ 学級の見直しは、学期のはじめとし、各学級の児童をある程度固定する。固定するねらいは、習熟度別の学級においても、個々の児童に安心感と存在感を育て、活発な話し合いを中心とした授業を実現しようと考えたからである。
- ・ 各学級の名前は、習熟の遅い学級から「こだま学級」「ひかり学級」「のぞみ学級」とする。学習進度の違いが一目瞭然の名前であるが、違いはあって当然であり、習熟が遅いから人間として劣るというわけではないことを指導することが大切だと考えているからである。

各学級における指導の基本的な手立て

習熟度別の学級では、児童の実態に合ったねらいと手立てを工夫する。そのために、単元の前にはレディネステストを行い、実態を把握した上で、単元の計画を立てる。学級の実態が大きく違うので、どんな内容を、いつ、どこまで、どのようにして指導するのか、単元全体を見通して計画を立てた。また、評価規準についても計画に盛り込むようにした。(5年「面積」指導計画 参照)

指導方法は、次のことを基本に指導を進めるようにした。

ア こだま学級

- ・ 教科書の基本的な問題(の番号の問題)を全員が理解し、できるようにする。
- ・ 繰り返し指導に重点をおく。そのため復習を多く行う。
- ・ できるだけ具体物を使い、操作活動や体験活動を取り入れて理解の助けとする。

イ ひかり学級

- ・ 教科書の内容を全員に理解させ、できるようにする。
- ・ できるだけ多くの児童が発見したり、気づいたりする喜びを味わわせることを大切にする。

ウ のぞみ学級

- ・ 教科書の内容を理解させるだけでなく、学習内容のより深い理解や自ら課題を見つけ、追究する喜びを味わわせるようにする。
- ・ 問題を解くことができるだけでなく、その解法の説明ができるようにする。
- ・ 公式は、覚えるのではなく、作り出す過程を重視する。

5年 面積（10時間完了） 指導計画（第1時抜粋）

時	内 容	こだま学級	ひかり学級	のぞみ学級
第 1 時	目 標	面積の意味や単位,長方形と正方形の面積を求める公式を理解することができる。	三角形や四角形の面積に興味をもち,単元の学習課題をつかむことができる。	四角形の面積は、三角形の面積をもとにして求められるという見通しをもつことができる。
	学習内容	長方形と正方形の部屋の広さを比べる方法を考える。	長方形の面積を求める方法を確認する。	不等辺四角形や直角三角形の面積を求める方法を考える。
		面積の意味,面積の単位を知る。	不等辺四角形や直角三角形の面積を求める方法を考える。	三角形の面積を求める。
		長方形と正方形の面積を求める公式を考える。	単元の学習内容を知る。	不等辺四角形の面積を求め,単元の学習内容を知る。
評価規準	面積の意味と単位を理解することができる。 (知・理B) <発表・机間指導>	直角三角形の面積を求める方法を考えようとする。 (関・意・態B) <発表・観察>	三角形の面積を既習の長方形の面積の求め方に関連づけて考えようとする。(見・考A) <机間指導・ノート点検>	
	長方形と正方形の面積を公式を使って求めることができる。 (表・処B) <発表・机間指導>	四角形の面積を求める方法を考えようとする。 (関・意・態B) <机間指導>	三角形の求積方法が分かれば,四角形の面積も求められることに気づくことができる。 (見・考A) <発表・ノート点検>	

() 成果と課題

習熟度別少人数指導に対して児童がどのように感じているかを把握するとともに,今後の方向性を探るために「算数に対するアンケート」を12月に実施した。

その結果,習熟度別少人数指導に約90%の児童が「とても好き」「どちらと言えば好き」と答えている。「通常の学級での授業よりも習熟度別指導の授業の方が好き」と答えた児童は約70%であった。習熟度別指導が好きな理由としては「進め方が自分に合っている」「先生がよく声をかけてくれる」の順で多かった。

1年目の成果としては,算数科における習熟度別少人数指導は,児童に受け入れられることが明らかになったことである。また,「進め方が自分に合っている」と答えている児童が多いことから,各学級における指導の基本的な手立てが有効であったと考えている。

13年度末と14年度12月の算数における観点別絶対評価の割合の比較では,4~6年生の平均でC段階の児童の割合が,知識・理解は約5.6%,表現・処理は約3.0%,数学的な思考・判断は約3.2%減少している。またA段階は,知識・理解が約6.0%,表現・処理が約8.9%,数学的な見方・考え方が約3.1%増加している。

今後の課題としては,「習熟度別指導を進めるときの評価の内容とその方法」,「他の教科における少人数指導の効果的な指導法のあり方と教材の開発」の2点を考えている。

() 成果の普及方策

- 管内教務主任を対象とした研究実践報告会での発表とホームページに掲載する。